

## お母さん、いつもありがとう

村上 真莉

「えっ。これは、夢だ。」

五年生の一学期。理科のテストが返された。今までで一番悪い点数。自分でもびっくりする点数だった。お母さんには見せたくなかった。だから、手紙の一番下に置いた。お母さんが手紙を見ていく。わたしは、ドキドキした。おこりませんように。そう心の中で祈った。お母さんは、理科のテストを見ると、目を丸くした。そしてわたしにこういった。

「どうしてこんな点数とったの。」

わたしは、泣きそうだった。テスト勉強もして、がんばったのに。わたしは、何も言い返さなかった。心の中では、なんでわたしがこんなにおこられないといけないの、と思った。でも、そのことを言うと、さらにおこられそうだったから、言うのをやめた。その日の夜、はらがたつてぬむれなかった。こんな点数をとった自分がくやしかった。すぐおこったお母さんにも、はらがたつた。一人でぶつぶつ文句を言っている、となりでねていた妹に、うるさいと言われた。わたしは、妹にもはらがたつた。

「ほっといてよ。」

と、妹に言い返した。

その週末、お母さんに、前にテストでまちがえた問題を自主勉強でやったらと言われた。もうあのテストは、思い出したくなかった。乗り気ではなかった。でも、お母さんに言われてしかたなくやった。なぜ、終わったテストをもう一度、自主

勉強でやらないといけないのか、意味が分からなかった。わたしは、またはらがたつた。

月曜日、自主勉強ノートを先生に出した。二時間目の始め、先生がみんなの前で、

「前の理科のテストでまちがえた問題を自主勉強で村上さんはやっていました。この勉強法はすばらしいです。」

と、言った。びっくりした。こんなことで、先生にほめられるとは、思ってもいなかった。家に帰ってお母さんに言うのと、やってよかったねと言われた。わたしは、うれしかった。終わったテストをもう一度、自主勉強する意味が分かった。まちがえた問題を分からないまま、おいとかず、分かるまですることが大切だと分かった。わたしは、テストの点数が悪くておこられたと思っていた。でも、次のテストに生かすためにおこってくれたと気付いた。

一学期の終わりに理科のまとめのテストがあった。前のテストと同じような問題が出た。ドキッとしたり。同じ失敗は、二度くり返さない。そう心にちかかった。自主勉強したことを思い出してすらすら解けた。今回は、自信があった。

翌日、テストが返された。百点だった。ヨッシャー、そう心の中でさげんだ。とてもうれしかった。家に帰ってお母さんに見せると、喜んでくれた。わたしのことを思っておこってくれたお母さん、いつもありがとう。